林謙三 東アジア音楽資料アーカイブスの構築

長谷部　　剛

Construction of an archive of HAYASHI Kenzo's Materials of East Asian Music

HASEBE Tsuyoshi

Hayashi Kenzo's unpublished manuscript, "Musical Scores for the Dunhuang Pipa and their Relation to Songs," looks at restored musical scores for the Dunhuang pipa (a type of Chinese lute from the Dunhuang area) to investigate what kinds of lyrical songs were sung in the actual performance of such music. While the manuscript is both undated and incomplete, signifi cant insights can be gleaned about the process of Hayashi's investigations and the traces of evidence they provide.

キーワード：隋唐（Sui; Tang）、燕楽（Ancient Chinese banquet music）、
敦煌琵琶譜（musical scores for the Dunhuang pipa）、
東アジア音楽研究（studies of East-Asian music）

1. 林謙三について

林謙三（本名、長屋謙三）は明治三十二（一八九九）年大阪市に生まれ、東京音楽学校（現、東京芸術大学）彫刻科に進む。彫刻家として大正十三（一九二四）年以降、ほぼ毎年連続して帝展に入選し、その前年からはホルンの演奏・作曲も始める。昭和二（一九二七）年秋、東洋古典音楽に関心を抱き、翌年その資料を求め通い始めた東洋文庫で郭沫若と知己となる。1930年代、『隋唐燕樂調研究』（後述）を完成させた後は、敦煌琵琶譜と（正倉院宝物）天平琵琶譜の解読に着手、さらに研究対象を東洋古楽器全般へと拡大。昭和一七年、『東亜楽器考』として富山房より出版を計画するものの、実現せぬまま終戦を迎え出版計画は途絶する。昭和二十二年、初めて正倉院宝庫に入り翌年には宮内庁図書頭より正倉院楽器調査の委託を受ける。その業績「東洋古代音楽の研究と正倉院古楽器の復元」をもって昭和二四年朝日賞を受賞。昭和二十六年には奈良学芸大学（現、奈良教育大学）教授に就任。催馬楽の研究にも着手。昭和三十年一二月訪日中の郭沫若と、日中戦争勃発のために電撃的に中国に帰国して以来十八年ぶりの再会を果たす。昭和四十年、奈良教育大学を定年退官し、布施女子短期大学（現、東大阪

大学短期大学部）教授となってからも、正倉院楽器の研究・復元を継続的に行い、さらには伎楽面まで研究範囲を拡大させた。昭和五十一（一九七六）年、七七歳で没した。

敦煌琵琶譜や天平琵琶譜などの古楽譜解読の成果は著書『雅楽―古楽譜の解読』（一九六九年、音楽之友社）に、長年にわたる正倉院楽器研究の成果は、『正倉院楽器の研究』（一九六四年、風間書院）に結集されたが、林謙三の研究は広範囲かつ膨大な量に及び、もちろんこれに尽くされるものではなく、またその研究の核心的部分について言えば、むしろ中国で広く知られるところとなっている。郭沫若の著作を多く日本語に翻訳した須田禎一氏は、郭沫若『則天武后筑―始皇帝と高漸離―』（一九六三年、平凡社東洋文庫）の「解説」「筑を奏でるテロリスト―高漸離の敵たちと同志たち―」五「筑という楽器」において、まず郭沫若自身のこの史劇についての解説文「私はかつて日本に住んでいたとき、友人の林謙三君の家で、一種の古楽器を見かけた。（…中略…）今にして考えれば、この楽器こそ往昔の筑であっと思う」を引用したあと、

> 林謙三（長屋謙三）氏は日本よりも中国で有名な学者で、その著『隋唐燕楽調（ママ）』は郭さんによって中国に訳されている。林氏の東京の邸は戦災に遭ったので、問題の古筑もすでに灰になってしまったろう。ぼくがいちど林氏の教示を乞いたいと思っているが、いまだにその機を得ない。

と述べる。この「林謙三（長屋謙三）氏は日本よりも中国で有名な学者」という記述は、まさしく私たちの認識そのものである。具体的に言えば、『隋唐燕樂調研究』を嚆矢として、一九五七年には潘懐素の訳によって『敦煌琵琶譜的解讀研究』が上海音楽出版社から刊行され、さらに一九六一（昭和三十六）年、郭沫若の命を受けた歐陽予倩からの申し出により、林謙三は日本での刊行が途絶していた『東亜楽器考』の原稿を手渡し、それが同名の中国語版として一九六二年北京、音楽出版社より出版される（『東亜楽器考』の中国語訳を担当したのは銭稲孫であるが一九六二年版には訳者の名前は記されていない。『東亜楽器考』は二〇一三年に上海書店出版社より新装版が出版されており、そこには「銭稲孫訳」と記されている）。一九八六年には、『隋唐燕樂調研究』が、哈爾浜師範大学古籍整理研究室によって凌廷堪（一七五七～一八〇九）『燕樂考原』、邱瓊蓀（一八九七～一九六四）『燕樂探微』の二書とともに『燕樂三書』として校訂のうえ刊行された（黒龍江人民出版社）。

一方、日本では『東亜楽器考』の日本語版が出版されたのは中国に遅れること十一年後の一九七三年であった（カワイ楽譜）。また、林謙三が一九五〇年代に傾注した催馬楽の研究は『催馬楽の音楽的研究』の題でまとめられているにもかかわらず、未刊行のままである。

2.『隋唐燕楽調研究』の反訳

筆者（長谷部）は、2003 年より釜谷武志・神戸大学名誉教授を研究代表者とする日本学術

振興会・科学研究費補助金・基盤研究（B）「六朝の楽府と楽府詩」の研究分担者として『宋書』楽志の訳注作業に参与した。この研究は、二〇〇六年の佐藤大志・広島大学教授を研究代表者とする科学研究費補助金・基盤研究（B）「南北朝楽府の多角的研究」へと発展し「六朝楽府の会」が組織され、山寺三知が長谷部とともにそれに加わり『隋書』音楽志の訳注作業を行った。この研究会は四年続き、最終的な成果として二〇一六年二月に和泉書院より『『隋書』音楽志訳注』を公刊した。

この『隋書』音樂志訳注作業の際、林謙三『隋唐燕樂調研究』は最も重要な研究資料であった。『隋唐燕楽調研究』は、林の処女作的著作であるが、中国語版があるのみで日本語版は存在しない。一九二一年、郁達夫らとともに文学結社「創造社」を結成、詩集『女神』を発表して二十世紀中国新文学の中心的人物であった郭沫若（一八九二～一九七八）は、その一方で社会革命運動に傾斜し二七年には北伐革命軍に参加、さらにまた四・一二クーデタの前夜、蔣介石を批判、地下に潜行し、南昌蜂起に参加するも失敗し、蔣介石からの迫害を恐れて二八年の始めに日本に亡命する。日本亡命中の郭沫若は、甲骨文字の研究資料を求めて訪れた東京、東洋文庫にて、これもまた中国古代音楽資料を求めて同所に通っていた林謙三と出会い、交友を結ぶ。その縁で林の研究を郭が中国語訳し一九三六年に上海の商務印書館より出版したのが『隋唐燕楽調研究』なのである。この時期の林と郭との交友および『隋唐燕楽調研究』出版の経緯については、山寺山知「林謙三と郭沫若―『隋唐燕楽調研究』誕生秘話」（『國學院雑誌』第117巻第11号、2016年）に詳しい。

『隋唐燕楽調研究』は中国語版があるのみで日本語版は存在しない。同書は、中国では郭沫若訳の中国語版があるために隋唐音楽研究、および音楽に関連する文学の領域で同書は必読の著と見なされていると言っても過言ではないが、日本での認識は中国ほど高くはない。日本の中国文学研究の領域でも同書を積極的に活用しているのは、管見の限りでいえば村上哲見『宋詞研究―唐五代北宋篇―』（一九七六年、創文社）などごく少数である。同書は全九章と附論からなり、第一章から第九章までは唐代の音律「（雅楽の）正律」「俗律」「清商律」のうち「俗律」が亀茲（キジル）樂の音律から生まれたことを出発点にして唐玄宗皇帝期までの音楽、特に「俗楽」=「燕樂」の実態について詳細な考察を加え、「附論」ではそしてそれが日本に伝来して「雅楽」を形成した過程での、その「雅楽」の調や音位まで復元を試みている。

北周、武帝（五四三～六七八在位）のとき亀茲から来朝した楽人、蘇祇婆がインド起源の七調の楽理を伝える。隋の学者、鄭譯は開皇二（五八二）年に雅楽の制定の際に、蘇祇婆の七調を、中国の「宮」「商」「角」「變徵」「徵」「羽」「変宮」の七音、および「黄鍾・大呂・太簇・夾鍾・姑洗・仲呂・蕤賓・林鍾・夷則・南呂・無射・応鍾」の十二律に適応させた八十四調の理論を提出する。理論的には八十四調あるうち、唐代には二十八調が「俗楽」=「燕樂」に用いられるようになり「燕樂二十八調」が成立する。『隋唐燕樂調研究』はこの「燕樂二十八調」が亀茲樂に基づいていること指摘し、さらに個別にその由来と後世の変化、雅楽や清商樂などほかの調・音律との対応関係を論じ、最終的には音高の推定まで行っている――以上が『隋唐

燕楽調研究』の主たる内容である。

長谷部・山寺を含め「六朝楽府の会」メンバーは必要に応じて同書を日本語訳しつつ『隋書』音樂志の訳注稿を作成したが、もとは日本語で書かれた著作であるにもかかわらず日本語版のないことを恨み無しとはしなかった。専門性が極めて高く、しかもこの研究領域では先駆的で独創的な研究であるために、内容・文辞の両面で難解な郭沫若の中国語訳でどれほど原著者である林謙三の意図が尽くされているか、不明であったからである。

折しも林謙三のご遺族である長屋糺氏（元、関西大学職員）のご厚意により、林謙三旧蔵書・旧稿を調査する機会に恵まれ、二〇一二年十二月以降、複数回にわたり、長谷部・山寺・佐藤と狩野雄（武庫川女子大学教授）が奈良の林謙三旧邸を訪問した。林謙三旧邸調査の結果、大部の未発表原稿を発見し、そのなかには「唐樂調の淵源」と題する原稿があった。表紙に「『東亜楽器考』附録　富山房」とあり、「唐樂調の淵源」は、一九四二年富山房より出版を計画するものの実現せぬまま終戦を迎え出版計画は途絶した『東亜楽器考』の附録として収められるはずであった論文であることがわかった。『東亜楽器考』は後年『東アジア楽器考』（一九七三年、カワイ出版）として出版されたが、一九七三年版には「唐樂調の淵源」は収められていない。同論文の内容を閲するに『隋唐燕樂調研究』と重なるところが多く、このことから中国語版『隋唐燕樂調研究』の出版後、林謙三みずから同書の日本語版を執筆していたことがわかる。前述したように同書は先駆的な研究であり、発表後の補訂や修正が必要な箇所もあったはずである。「唐樂調の淵源」はそれがなされていることになり、『隋唐燕樂調研究』とペアで公開され研究者に活用されるべきものであった。ただし、分量的に『隋唐燕樂調研究』の全部に対応しているわけではなく、カバーできない部分は中国語版を日本語訳し、それと「唐樂調の淵源」の解読・翻刻作業によって『隋唐燕樂調研究』の全貌を新しくよみがえらせようと考えたのである。

その結果、長谷部剛と山寺三知の共編訳といかたちで『林謙三『隋唐燕樂調研究』とその周辺』が 2017 年 3 月に関西大学出版部より刊行された。

3. 林謙三東アジア音楽資料アーカイブスの構築

2014 年、林謙三のご遺族は林氏旧蔵の音楽研究資料および未発表原稿を関西大学に寄贈することに同意された。同年以降、筆者（長谷部）は林謙三旧蔵東アジア音楽研究資料整理・解読作業に従事している。

林氏旧蔵音楽資料には、極めて重要な資料が含まれており、中国文学研究者・中国音楽研究者・日本音楽研究者の三者が連携してその整理・研究にあたらなければならないと考えている。具体的には、林謙三は敦煌琵琶譜の解読に成功した（「敦煌琵琶譜の解読」、『雅楽―古楽譜の解読―』所収、音楽之友社）のちに、「歌詞と楽」と題する原稿を執筆した。これは、自ら復元した敦煌琵琶譜に、王重民 [輯]『敦煌曲子詞集』所収の同名曲（「何満子」など）の歌辞を

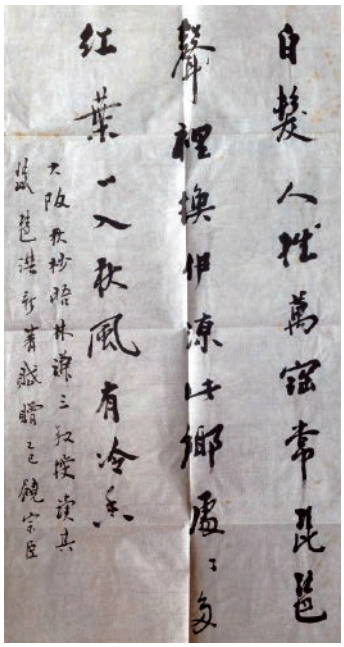
配し、実際の歌唱の形態を探ろうとしたもの。また、敦煌琵琶譜の解読では四弦琵琶の調弦方法を生涯にわたって再検討しつづけた形跡がわかる草稿ものこされている。さらに、林謙三は生前、江戸時代の雅楽資料を広く収集しており、なかには『長谷川生問答』など、『国書総目録』に記載されるものの、同目録に著録されるテキストは焼失してしまったので、林謙三が書写したテキストが唯一現存するものとなっている。林謙三旧蔵の東アジア音楽研究資料は未公表であったために、その存在と学術的価値はこれまで東アジア音楽研究者および中国文学者にほとんど知られていなかった。両者の研究者が共同して整理・研究にあたる必要性が痛感される。

さらに、2017 年 9 月、林謙三のご遺族は、これまで長谷部・山寺両名に閲覧を許可されておられなかった新資料を新たに提示された。その新資料のなかには、林謙三が記した 1948 年より始まる正倉院楽器調査の詳細な日誌や、未発表原稿「天平の音楽を探る」など、本研究にとって極めて貴重な資料が含まれているばかりか、平出久雄（東アジア音楽学）・金田一春彦（日本語学）・土橋寛（日本古代歌謡研究）など日本の研究者、Robert van Gulik（中国音楽学）・欧陽予倩（演劇）・卞趙如蘭（中国音楽学）・饒宗頤（敦煌学）・夏承燾（中国詞学）など海外の研究者からの林謙三宛書簡などもある。これらの学者との学術的交流の軌跡は、林謙三の東アジア音楽研究、特に敦煌琵琶譜の解読について考える場合、極めて重要である。

4. 林謙三の敦煌琵琶譜研究

例えば、敦煌琵琶譜の解読において重要な資料として P. 3559「二十譜字」があるが、これは林謙三が 1957 年に『敦煌琵琶譜的解読研究』（中国語版）を出版したあと 1959 年に入手したもので、1964 年の『正倉院楽器の研究』においてはこの P. 3559「二十譜字」を取り入れて琵琶の音位推定を進めている。実はこの P. 3559 は趙元任が琵琶譜であることに気づき、娘の卞趙如蘭に命じて林謙三へ複写版を送らせたものである。林と卞趙には二十年近い交流があり、卞趙からの書簡は林謙三旧邸に、林からの書簡は香港中文大学図書館に保存されている。これら資料を調査し、両者の交流の軌跡と林謙三の敦煌琵琶譜研究との関係を整理する必要がある。

また、饒宗頤と林との交流も極めて重要である。なぜならば、饒は 1991 年の『敦煌琵琶譜論文集』によって林の後年の研究成果を中国語圏に紹介しているからである。饒宗頤と林との交流は饒宗頤が 1965 年に大阪で林謙三と会ったことから始まるようである。林謙三旧蔵資料には、饒が林に贈った七言絶句の書がある。



白髪人牲萬寶常

琵琶聲裡換伊涼

此郷處處多紅葉

一入秋風有冷香

大阪秋杪晤林謙三教讀其

琵琶譜新著賦贈乙巳饒宗頤

萬寶常は、隋の音楽家。隋の楽制度改革の際に、琵琶による八十四調を提出した。『隋書』巻七十八「藝術」に傳がある。郭沫若「隋代音樂家――萬寶常」（1936）は、萬寶常が「樂戸」に属していたことから「奴隷」とみなし、さらに、『隋書』巻十四「音樂志」中では、琵琶八十四調は隋の柱國沛公、鄭譯が提出したものとされているが、鄭譯は萬寶常の説を剽窃したと、郭沫若は主張している。萬寶常は隋の太常寺において認められず排撃され悲劇的な最期を遂げる。萬寶常は隋の楽制度改革の犠牲者であった。「人牲」とは、郭沫若『中國古代社會研究』において、犠牲となる奴隷を指す語として用いられている。饒宗頤の「人　牲萬寶常」という表現は、林謙三の『隋唐燕楽調研究』（1936）を中国語訳した郭沫若の語を用い、隋唐の音楽、そしてそれの体系を明らかにした林謙三＝郭沫若のことを念頭においたものと解釈できる。「伊涼」とは、唐代の楽曲「伊州」と「涼州」。「伊州」については、敦煌琵琶譜中にもあり、「涼州」は唐代、琵琶曲として広く演奏されたことが『樂府雜錄』などによってわかる。

この七絶は、饒宗頤が 1965 年（乙巳）の秋に大阪で林謙三と会い、その時に贈ったものである。

敦煌歌辞（敦煌曲子詞）は、宋詞へとつながる音楽性の強い唐代韻文学作品群であるが、日本では研究がほとんど行われていない一方、中国においても任半塘『敦煌歌辞総編』（1987）の出現が頂点であり、その後に大きく研究が進展したとは言えない。とくに「敦煌歌辞はいかなる音楽によって歌唱されたのか」という問いに関しては、林が「天平・平安時代の音楽古楽

譜の解読による」（1965）において一部試みており、また陳応時「敦煌楽譜的詞曲組合」（1990）など音楽学者の成果はあるものの、文学研究者がそれを取り入れて唐代韻文学と音楽との関係を総合的に考察しようとした例は少ない。林謙三は比較的早期に、しかもほぼ独力でこの問題に取り組んだ研究者である。林謙三旧邸蔵の原稿には「歌詞と楽」「敦煌琵琶譜と曲子の関係」「唐代に歌われた詩辞について」と題するものがあり、いずれも未完成・未発表に終わっているが、林は唐代歌辞に関する資料を渉猟し、歌辞の性質や種類、その歌われた状況や歌唱方法について探究していたのである。

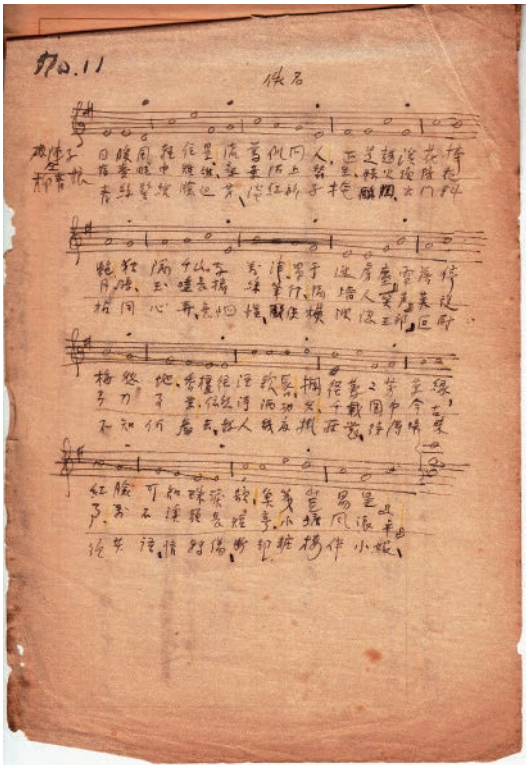
林謙三の未発表原稿「敦煌琵琶譜と曲子の関係」には以下のようにある。

> 敦煌琵琶譜の絶対年代は未詳であるけれど、その内容が多数の曲子を含むことや楽曲の構造調性などが盛唐代のものより大分異なる点などに置いて晩唐を遡り得ないものと考える。二十曲中、単に「曲子」と題するもの二、「漫曲子」四、「急曲子」三、「慢曲子」と冠称するもの三、以上十二曲の多数に及ぶ。この点より考えて他の曲も盛唐代の楽よりやや変遷した「曲子」と総称するものに包含され、この歌詞は曲子詞であることもまた疑う余地はないのである。本譜の曲名に応ずる詞はわずかに一曲、その他は敦煌石室から出土曲子詞中にも晩唐代詞人の作中にも一つとして適合するものがない。『雲謡集』の「傾杯楽」は一譜字は一間拍をもつを原則としており、本譜の字数と詞の字数との間にたしかに関係があるらしい。と云うのはこの字数を調べてみるに、一段五六十字前後で詞の小令があてはまるほどであるからである。当時は後世ほど詞の歌唱に長短の差がないことが証明されるならば、この譜の字数によって原詞の字数を想像〔すること〕も許されるわけである。

林はさらに、敦煌琵琶譜の一曲に、唐の曲子詞、宋詞の歌詞を配置した、復元楽譜を残している。この楽譜「No. 11 佚名」に記される三首の歌詞は、

1. 第一曲：『雲謡集』「破陣子（単于迷虜塵）」
2. 第二曲：辛棄疾「破陣子」
3. 第三曲：『雲謡集』「柳青娘（倚闌人）」第一首

である。この曲は林謙三が「No. 11 佚名」と題する通り、敦煌琵琶譜のなかでも曲名が記されていないものであるが、本原稿で「破陣子」の歌詞が配されていることから、林氏はこの曲を「破陣子」と関係があるものとして見なしていたと推測される。



この「敦煌琵琶譜の解読」では、復元された敦煌琵琶譜が実際にどのような歌詞の歌唱とともに演奏されたかについては論及されていない。唯一、LP レコード「天平、平安時代の音楽―古楽譜の解読による」（コロンビア・レコード、1965 年）では、敦煌琵琶譜 No. 13「又慢曲子　西江月」に同名の敦煌曲子詞（S. 2607v）を配しているが、これ一曲に止まる。

今回紹介した、「敦煌琵琶譜と曲子の関係」は、この問題について林氏が検討を加え苦闘していたことを示すものである。敦煌石窟より発見された唐五代の長短句歌詞、すなわち敦煌曲子詞は、宋代に一大ジャンルを形成する詞文学の源流として位置づけられるものであり、敦煌曲子詞と楽曲との関係はいまだ解明されていない重要な研究課題である。従って、林謙三「敦煌琵琶譜と曲子の関係」は未完成ではあるが、その検討の過程および痕跡は、われわれに大きな示唆を与えるものと考えられる。

5. 林謙三東アジア音楽資料アーカイブスの構築

このように、林謙三旧蔵資料は東アジア音楽と文学に関連する極めて重要な資料を含んでおり、筆者（長谷部）は、日本学術振興会の科学研究費補助金・基盤研究（B）を得て、「東アジア古代歌謡の文学的・音楽学的アプローチによる双方的研究」のテーマのもと、林謙三東ア

ジア音楽資料アーカイブスの構築を目指している（研究期間：2021-2024）。以下に掲げる「林謙三旧蔵資料分類項目」のもと、同資料を整理し、東アジア音楽研究の点からみて重要なものについてはデジタル・アーカイブズする予定である。

林謙三旧蔵資料分類項目		
◎和本（線装本） ◎洋装本 ◎展覧会図録 ◎演奏会プログラムノート ◎雑誌 ◎写真フィルム ◎音声カセットテープ・オープンリールテープ ◎ LP レコード ◎個人資料、家族資料 ◎伝記資料（書簡・新聞切り抜き・日録・日記・自作年譜・文献目録・名刺など）	◎草稿（催馬楽・正倉院楽器・東亜楽器考・五絃譜・明楽・琴楽・江戸音楽・雅楽・天平の音楽を探る・楽器学・伎楽曲・伎楽面・その他） ◎メモ資料（催馬楽・正倉院楽器・東亜楽器考・五絃譜・明楽・琴楽・江戸音楽・雅楽・天平の音楽を探る・楽器学・伎楽曲・伎楽面・その他） ◎復元楽器の五線譜 ◎楽器等写真 ◎正倉院楽器調査採寸資料 ◎楽器現物	◎林謙三著作物現物（抜き刷り・著書・雑誌・複写物） ◎寄贈抜き刷り ◎彫刻彫塑関係資料 ◎ピアノ楽譜 ◎内容不明記譜 ◎幼児児童教育関係 ◎太田太郎関係資料 ◎篆刻・印鑑等 ◎色紙

2021 年 10 月 11 日